

● 学会発表の内容

OPNは有用な胚となり得るか

医療法人社団 徐クリニックARTセンター

峰 千尋、清須 知栄子、伊藤 真理、中塚 愛、徐 東舜

■【目的】

今回、OPN胚の有用性を確認するため、胚発生能、妊娠率、流産率および生児獲得率について検討した。

■【対象及び方法】

2013年1月から2013年12月に採卵を行った565周期を対象とし（平均年齢 38.0 ± 4.3 歳）、OPN胚と2PN胚における分割率、Day5胚盤胞到達率、Day5良好胚盤胞到達率（3BB以上）、及び3BB以上のSETにおける妊娠率、流産率を比較した。SET時の平均年齢は、OPN胚 33.9 ± 4.9 歳、2PN胚 36.2 ± 3.9 歳で、OPN由来胚を移植する際にはインフォームドコンセントを行い、同意を得た後に移植した。

■【結果】

OPN胚と2PN胚の成績は、分割率28.1%（165/588）vs. 98.5%（2029/2059）、Day5胚盤胞到達率30.2%（49/162）vs. 62.2%（1215/1952）、Day5良好胚盤胞到達率59.2%（29/49）vs. 46.5%（565/1215）となり、分割率および胚盤胞到達率においては有意な差が認められたが、良好胚盤胞到達率においては差が認められなかった。3BB以上のSETにおけるOPN胚と2PN胚の成績は、妊娠率77.8%（7/9）vs. 45.7%（122/267）、流産率14.3%（1/7）vs. 32.0%（39/122）、生児獲得率85.7%（6/7）vs. 68.0%（83/122）と、各項目で有意な差は認められなかったが、OPN胚の方が成績良好な傾向が見られた。OPN胚由来の児について、出生時の平均体重は 3077 ± 682 gであった。

■【結語】

OPN胚は、胚発育の過程で2PN胚と差が見られたが、形態良好な胚盤胞を移植した場合の妊娠率は良好であり、生児を得ることができた。以上のことから、OPN胚を培養し、形態良好な胚盤胞が得られた場合、その胚を治療に用いることは可能であると考えられた。